

# 二〇一一年度・学力考查問題【国語】

(高校第二回)

## 注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は14ページで**一・二・三・四**の四題あります。開始の合図で必ず確認し、そろつていないう場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。  
また、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に數えます。

――線あへおのひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 開校から現在までのえんかくを説明する。
- 2 七月の時候の挨拶に「せいいかの候」がある。
- 3 実行するべきかけんとうを重ねる。
- 4 外国人にお寺や神社のさんばい方法を説明する。
- 5 周囲から選舉への出馬を要請されたがこじする。

――次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

族研究の評論<sup>\*2</sup>) の中で、島民としてのアイデンティティは、漁労を営み、土地を耕し収穫をし、また、土地や海に宿る神々に祈る儀礼などの様々な行為を通して生まれていき、そして、日々の労苦を通じて大自然の恵を分かち合つて食することで、親族の血縁関係を中心とした仲間意識を形成していくと検証しています。そこから一般に、アイデンティティとは本質的にどいかに「states of doing (行為の状態)」から生まれるとして在るのではなく、「states of being (所与の状態)」としています。「日本人」という意識には、大地を耕す農耕民たちの連綿とした営みと祈りの中から創られてきた米の文化が根差している側面があると言えます。

茶碗<sup>1</sup>に盛られたご飯は家族で囲む食卓に欠かせないものです。子どもがお米を残したりすると「お百姓さんに申し訳ない」とか「神様に怒られてしまう」と言われたりします。この言葉には日本の神話にまで遡<sup>2</sup>ることができる文化と歴史の背景があります。文化人類学者の大貫恵美子<sup>3</sup>が『コメの人類学』<sup>4</sup>で明らかにしているように、日本の大地には平和、創造力、豊穣性の源になる神々が宿り、稻田の神も、成長とエネルギーの源であり、日本人の身体の生成を促し再活性化させると信じられてきました。農民たちが永々として耕作し続けてきた恵みとしての米だからこそ、日本人は安堵感<sup>5</sup>を持つて主食として食べているのです。

ミクロネシアのヤップ島の研究をしたアメリカの文化人類学者ディヴィッド・シェナイダーは、*A Critique of the Studies of Kinship* (『親

族研究の評論<sup>\*1</sup>) の中で、島民としてのアイデンティティは、漁労を営み、土地を耕し収穫をし、また、土地や海に宿る神々に祈る儀礼などの様々な行為を通して生まれていき、そして、日々の労苦を通じて大自然の恵を分かち合つて食することで、親族の血縁関係を中心とした仲間意識を形成していくと検証しています。そこから一般に、アイデンティティとは本質的にどいかに「states of doing (行為の状態)」から生まれるとしています。「日本人」という意識には、大地を耕す農耕民たちの連綿とした営みと祈りの中から創られてきた米の文化が根差している側面があると言えます。

茶碗<sup>1</sup>に盛られたご飯は家族で囲む食卓に欠かせないものです。子どもがお米を残したりすると「お百姓さんに申し訳ない」とか「神様に怒られてしまう」と言われたりします。この言葉には日本の神話にまで遡<sup>2</sup>ことができる文化と歴史の背景があります。文化人類学者の大貫恵美子<sup>3</sup>が『コメの人類学』<sup>4</sup>で明らかにしているように、日本の大地には平和、創造力、豊穣性の源になる神々が宿り、稻田の神も、成長とエネルギーの源であり、日本人の身体の生成を促し再活性化させると信じられてきました。農民たちが永々として耕作し続けてきた恵みとしての米だからこそ、日本人は安堵感<sup>5</sup>を持つて主食として食べているのです。

ミクロネシアのヤップ島の研究をしたアメリカの文化人類学者ディヴィッド・シェナイダーは、*A Critique of the Studies of Kinship* (『親

26～28節）。イエスが地上に遣わされたのは、人間の「原罪」を贖う<sup>\*5</sup>ためであり、その身体の犠牲は、信者たちの永遠の命を約束すると信じられています。

つまりパンはキリスト教徒たちの世界観の中に位置づけられ、日本人の認識の仕方とは根本的に違います。ここから、それぞれの文化で、「諺<sup>\*6</sup>が生まれています。大貫恵美子（前掲書）が挙げている例では、英語で「生活に関する問題」は“bread-and-butter issue”と表現し、「家族で稼ぐ人」は“bread-winner”と言います。他方、日本では、職場や生活の場などで苦楽を共にして、親しくなることを「同じ釜の飯を食う」と表現しますし、生活のための手段を「飯の種」と言います。欧米圏のパンも日本の米もそれぞれの文化的意味がライフスタイルの意識の中に浸透しているのです。

牛肉（beef）には、英語では「議論の根幹」という意味や「身体の活力」という意味もあります。アメリカの文化人類学者マーシャル・サーリングスは、牛という体も大きく力強い動物を飼いならすために多大な労力がかかるところから、牛を家畜にして食べることは「自然」を人間の「文化」が「支配する」ことを象徴している一例だと検証しています（『人類学と文化記号論』）。このでの「自然／文化」とは構造人類学の概念で、クロード・レヴィ＝ストロースが『親族の基本構造』で明らかにした人類の普遍的思考で、人間の無意識に内在する二分法です。「自然」は生与または所与の状態のもので混沌<sup>\*7</sup>としており、時として不安や脅威<sup>\*8</sup>の存在になりうる状態や感覚を指します。「文化」とは分類体系や秩序体系を意味し、安定と規律規範全般を生み出し、人に安堵感や温かみをもたらす領野です。人類は、近代化されるはるか昔から、自然から文化へ変換するという知的作業を行なつてきたの

です。

マクドナルドでは、夕方になると、高校生や若者たち同士が、昼食と夕食の間の空腹を満たし、長々と楽しげに語り合う姿がよく見られます。そこで、好きな時間だけ、会話を楽しみ、ゲームなどをし、自由でリラックスした雰囲気を味わっています。彼ら彼女たちは、学校でもなく家でもない、「第三の居場所」として、居心地の良い場所をマクドナルドに求めているとれます。大貫恵美子が主張しているようく、「個人主義」や「自由」を享受する場所です（前掲書）。普段の日常で求められる家での儀<sup>\*9</sup>や規律、学校での価値規範や競争意識とは無縁な場所です。若者たちは子どもから大人社会に入る「中間<sup>\*10</sup>」的存 在ですから、成長の過程では普段の学校生活が、時に窮屈に感じたり、苛立ちを抱いたり、反抗的感情を持つこともあります。この意味で、マクドナルドは、学校や家庭などといった「日常」の所与の環境とう「自然」から解放され、自由になり、安堵感や心地良さを体感する場所「サードプレイス」になつていると解釈できます。

この「自由な感覚」は、スターバックスでも味わうことができますが、「サードプレイス」として、マクドナルドとはまた違った「文化」の世界を創っています。詳しくは後述しますが、アメリカの歴史学者ブライアン・サイモンは「お望みなのはコーヒーですか？」で、サードプレイスとは家というオフの場と会社や学校のオンの場との「間」を指し、オンでもなくオフでもない自由になる感覚を味わう場としています。本来の自分に返ることができる場で、人は家や会社で起きたことを振り返って、自分についてリラックスして考えたりするのです。

あるいは気心の知れた仲間と会話を心から楽しむ自由な感覚を共有しています。スタッフたちが洗練されたサービスで良い雰囲気を作るよう意識し、心地良いくつろげるようになっています。気配りや目配りをして、客が求めていることや多様な好みに臨機応変に対応しているのです。

人の成長過程は「日常」の時間の中では連續したものとして感じられます。あらゆる地域社会において、その時間の流れに文化的に区切りを入れる「非日常」の時が形成されているとフランスの文化人類学者ファン・ヘネップは『通過儀礼』で言っています。結婚式や成人式などのように、人は「日常」から一旦離れ、儀礼という「非日常」の世界に入り、新たな思いで「日常」に再び戻るということを通じて、古い自己から新しい自己に再生成されます。このモデルは、マクドナルドにもスターバックスにもあてはめられます。つまり「日常」の生活では階層的関係があり、規律規範などが重んじられ、自己の能力の向上を目指すことが期待されます。他方、「非日常」では、自由でリラックスでき、友人と語り合うことで、上下関係とは無縁な平等な感覚を味わうことができ、素のままの自分を感じます。つまり、「日常」から、自ら「非日常」の時空に逐次参入し、自分らしさを新たに再確認することができるのです。

家の食卓でお米を食べている際には、家族の成員の序列の他、食べ方などの儀や規律などが反映されています。米と共に食べることで階層的関係による社会的紐帯<sup>\*9</sup>を再確認します。しかし、マクドナルドでもスター・バックスでも、当然、このような「日常」の規律規範からは解放されています。マクドナルドのハンバーガーを食べるにしても、

スター・バックスで、たとえばラテと一緒にスコーンを食べるにしても、当然、注文したものは友人同士で共有するものではありません。その時の気分や好み次第で、また、自分の気のあつた仲間と好きなだけ楽しめる場所です。自分の好みに従って選び、好きな場所に座り、それが自由気<sup>\*8</sup>に談笑している時は、家で米を食べる時の感覚とはまた別の感覚を味わっているのです。この意味でも、マクドナルドでもスター・バックスでも、「非日常」の舞台を用意していると言えます。

これらのアメリカからの飲食文化は、日本人が米を中心として形成してきた価値規範や規律から離れ「自由」を楽しめる場所として認識されていきます。家でご飯を食べる所が食卓としてあらかじめ固定されている意味で「領土的」とすれば、マクドナルドもスター・バックスも、店も座る場所も自分の好みで選べる「脱領土的」なものとして、家庭とは違<sup>\*10</sup>うオールタナティブな感覚を味わう場所になります。知人同士で行けば、仲間意識を再確認する場にもなりますが、あくまで個人の意志と自由な感覚が重視されます。また、食材の米が日本の大地で収穫された「領土的」なものであるのに対し、マクドナルドもスター・バックスも、牛肉でもコーヒーの豆でも、原産地がグローバルな形で生産されたものが効率的に合理的に作られたもので、この意味でも「脱領土的」と言えます。このアメリカを中心として展開されてきたグローバリズムの流れで形成された場所としてマクドナルドもスター・バックスも位置づけることができます。

（『連続講義〈食べる〉といふこと——「食」と「文化」を考える』

ペリカン社所収　吉田光宏「外来文化の受容ロジック」より）

※1 文化人類学者：文化によつて成立する人類社会を理解する学

問の研究者のこと。

※2 アイデンティティ：他のものとは異なる自分という存在への意識。自分らしさや個性のこと。

※3 グローバル：世界的な規模であるさま。

※4 聖餐式：キリスト教の儀式の一つ。

※5 「原罪」を贖う：人間が生まれながらに背負った罪（原罪）を、

イエスが自ら処刑されることによつて償つたとする、キリスト教の基本の教えのこと。

※6 クロード・レビューストロース：一九〇八年～一九〇九年。フランスの社会人類学者、民族学者。構造主義の祖とされる。

※7 生与または所与：ここでは、人間個人が生存する以前から存在するものを指す。

※8 逐次：順を追つて。

※9 紐帶：ここでは、人と人を結びつけるものを指す。

※10 オールタナティブ：現在あるものに取つて代わる新しいもの。

イ 農民たちが作つてきた、恵みとしての米を皆で分かち合う

ことが、「日本人」という共通意識を培うことにつながる。

ウ 米を食べるという行為が、自分は「日本人」であるという

意識を強め、外国文化に対する優越感が育まれる。

エ 一緒に食事をすることが、自分が属する集団意識への愛着につながり、それによつて日本の歴史や文化が改善されるようになる。

## 問二

——線2「西洋からもたらされた（）ハンバーガー」とあり

ますが、西洋における「パン」「牛肉」「ハンバーガー」について述べたものとして適當なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 欧米圏の宗教的世界觀の中において、パンには單なる食べ物以上の意味が付与されている。

イ 自然の支配下に人間を置こうとする流れの延長に、キリスト教のパンをもちいた身体の支配がある。

ウ 欧米圏ではパンに関する諺は、地域によつて正反対の意味を持つことすらある。

ますが、日本人が「（）飯」を食べることについて述べたものとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 昔から慣れ親しんだ米を家族がそろつてとる行為によつて、労苦を積み重ねてきた家族の歴史や、同じ血縁関係である絆が再確認されていく。

問三 線3 「マクドナルドでも！」用意している」について。

(1) 「『非日常』の舞台」とあります、それはどのような場所の「」とですか。文中から六字で探し、解答欄に合うように抜き出しなさい。

(2) 答者はこのような「『非日常』の舞台」がどのような役割を

果たしていると考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 窮屈にも思える日常の時間の連続に区切りをつけて、個人

が自由に振る舞えるようにすることで、自分という存在を新たにして日常に再び戻していくという役割。

イ 改めて自由の意味を確認させて、規範的で階層的な学校のなかにおいても、それらに制約されない自由な行動を取らせるという役割。

ウ 友人同士でリラックスできる時間を与え、学校やその他の学校以外の場所とは異なった形の、気心の知れた親密な友人関係を築かせるという役割。

エ 子どもにとって仲間と好きなだけ楽しんでくつろがせて、大人にとっては日常に区切りをつけ新たな自分を再確認させるという役割。

問四 線4 「領土的」・5 「脱領土的」について。

化における「領土的」「脱領土的」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 世界的に拡大した異なる地域の飲食文化を、若者が積極的に受容したため、長い歴史を持つ地域固有の飲食文化が失われようとしている。

イ 自分たちの飲食文化が長い歴史のなかで駆けや規範などの束縛的なものに変わり果てたことに對して、新たな外来の飲食文化がその状況を改善していく。

ウ 世界規模の交流により新しい飲食文化が登場するなかで、その影響から独自の地域的な文化を守ろうとするために、外のものを排除しようとする動きが起きていく。

エ 歴史的に飲食文化はその地域独自で培われてきたが、食材が世界的に波及し、それらが各文化の中に位置づけられるこ

問五 次の各文は、本文を読んだ生徒がその内容について話している

ものです。筆者の考えに最も近い意見を述べている生徒を次のなかから選び、記号で答えなさい。

ア Aさん：マクドナルドやスターバックスはアメリカ的で自由な場所だと思ってたけど、結局は日本的に作り変えられて空気を読まなければいけないところだから、本当は安心できる場所なんてどこにもないよね。

イ B君：マクドナルドやスターバックスは食事をする場所というよりは気分転換できる場所だから、学校や家や友達のことで嫌な気分になつても、そこでくつろいでいるとどんなことにも悩まなくなるよね。

ウ Cさん：少しお腹を満たすにしてもマクドナルドやスター バックスだと手軽にできるし、そこではゆったりと過ごせるから、不安などを感じることもある普段の生活にも気持ちを新しくして向き合うことができるよ。

エ D君：マクドナルドやスターバックスは窮屈さや居心地の悪さを感じさせる日常から自由してくれるだけでなく、そんな古臭い考え方や文化をぶち壊して、グローバルな新しい文化や規範を作り出してくれるところだと思うな。

## 二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

中学に入学した「ダイスケ（＝僕）」は、「コウキ」と柔道部初心者コンビとして入部する。仲のよかつた二人に対して、先輩は試合をすることを強要し、負けた「コウキ」は部員からいじめを受けて自殺を図る。「コウキ」は無事であったが、「ダイスケ」のお見舞いを受け入れない。「コウキ」は二年生になると転校し、試合に勝つてしまい責任を感じている「ダイスケ」は家に引きこもるようになる。

そのような中「ダイスケ」は、自分が撮った写真だれを投函とうかんすると、誰かが撮った写真が自分に届くという「空色ポスト」の存在を知り、少しずつ外に出られるようになる。「ダイスケ」が高校三年生になる頃、彼の写真が「空色ポスト写真展」に選ばれた。その展覧会で「ダイスケ」は、車いすに乗った「コウキ」と再会する。

コウキと僕だけだ。

世の中がそういうふうに用意してくれたのだ、とわかつた。

これは夢じゃない。いま僕が車いすを押しているコウキはにせものじゃない。その証拠に、今まで僕が心のなかに登場させてきた幻まぼろのコウキは、車いすに乗ってはいなかつた。

白の空間に、僕とコウキだけがいる。車いすの両輪は、音もなく、

なめらかに回りつづける。

「これ」と、僕は足を止めた。「雀のやつ。おれの」<sup>すずめ</sup>

コウキはまず、黙つて写真をじっくり観察した。隅から隅まで。目線よりは高い位置にあるから、頭が後ろに傾いている。

そしてひとつ息を吐き、ひとこと、「すごい」といった。

僕の胸のうちがじんわりと温かくなる。コウキはまだ写真から視線を外さない。

なあ、コウキ、と僕は思う。

今までどうしてた?

「やっぱりダイスケはすごいなあ……」<sup>1</sup>

こちらを振り向いてコウキがいった。思ぬ言葉が飛び出してきた

ので、僕は返事に困ってしまう。照れ笑いを浮かべるだけだ。しゃべるのがへたになつてゐるのだろう、やはり。やつとのことで、そんなことないと答えただけれど、それもかすれ声になつた。

誰もいない写真展。真っ白の壁、床、天井。

いつもとは時間の流れかたが全然ちがつてゐる。僕にはそれが心地よかつた。時間はいつもよりゆっくりで、くねくねしている。決してまつすぐには突き進まない。寄り道もするし、なんなら引き返したりもする。

むかしの友達の乗る車いすを、僕が押している。それが引き金となつて、こんなふうに、世の中を変えたのだ。

「コウキのはどれなんだよ?」僕が訊くと、「大したことないよ、おれのは」なんて謙遜するから、後頭部を指で弾いてやつた。  
「なにすんだよ」

「うるせえ」

僕の写真を見せるために、ほかの写真を見ることなくここまで来てしまつていたから、僕たちは最初からやりなおした。入口のすぐ横から壁づたいに、コウキの撮った写真を探す。一枚一枚に時間をかけている心の余裕はなかつた。するすると進んでいく。

やがてふたたび僕の写真を通り過ぎ、コウキがしぶしぶといつたぐあいで指を差した。

それは見覚えのない写真だつた。入口の向かいに位置する壁の、どまんなかに貼られている。そんない場所に、展示を一周したはずの僕にも見覚えのない写真が貼られている。僕は車いすのハンドルから手を離し、コウキの隣に並ぶ。

「その写真は、あまりにも強烈だつた。」

「ここ——」といつたまま僕の口はぴたりと止まつた。時間がこれまでよりも激しくうねりはじめるのが、肌で感じられる。ここは、僕たちの。五年前から四年前にかけての、あの一年に満たないあいだの。むかしに引き戻される。頭がぐるぐるする。コウキはいつたいどういうつもりでこの写真を撮つたのか。めまい。のどが渴く。心がたわむ。体が揺らぐ。「ここは——」。コウキが隣で「おれなりの覚悟だつた」という。笑つてゐる。「覚悟を決めて、ここを撮つた」

それは、歩道橋の写真だ。

あの日々、部活の帰り、ふたり並んで何度も渡り、何度も語らつた

歩道橋。

歩道橋の上から、遠くを望むアングルで、柵越しに夕焼けを捉えている。カメラの位置はたぶん高くない。ちょうど、車いすの高さ。――

ああ、と僕は思う。あのころ上り下りしていた歩道橋の階段を、コウキはもう使わないのか。代わりにスロープを使うのか。

\*<sup>1</sup> ハンドルネームは「コウキ」で。

「僕は友達を待っています」というのが、この写真に添えられた短い言葉だった。

心臓が、血液ではなく涙を全身に送り出している。やがて体の容積が足りなくなつて、たくさん溢れてくるだろう。そうなるままに任せたおこうと思つた。鼓動がひとつ弾むたび、おおよそ八十ミリリットルの涙が血管を駆けめぐり、筋肉や脂肪や骨や皮膚に滲みわたる。それでいい。

僕たちは長い時間そうして写真を見つめていた。

この歩道橋さ、と僕はつぶやくようについた。「おれも、前に行つたよ。中一のとき」

「そうか」コウキはうなずいてつづきを待つ。  
※<sup>2</sup> 「クドウ先輩が通つてさ。あのひと、お人好しだから、新しい一年生にカモにされてた」

「そうか」

僕たちはまたしばらく黙つた。なにかいう前に頭のなかで言葉を吟味して、口に出すことなく諦めてしまう。それは心地よい時間だった。空調の音だけが空間に響く。

やがて、会いに行かなくてごめん、と、コウキがつぶやく。

コウキの口からこぼれたその言葉は、この白の空間に、しゃぼん玉の泡となつて浮かんだ。空気に乗つて流れていき、僕の耳に入つて割れる。

いいよ、そんなの。僕はいった。「おれも行かなかつたし。それに、たつた四年だよ。なんてことない」僕の言葉も同じように泡となつて流れていく。

しかしコウキは、「そうじゃないんだ」

とうつむいた。

「たぶん——十年なんだ」

そういつてポケットから一枚の写真を取り出す。いま見ているのは別の写真だつた。両方の手のひらの上に載せ、こちらに突き出してくる。

こんどは見覚えがあつた。とても。まったく同じものを、僕も持つてゐるから。部屋の箪笥<sup>たんす</sup>の上に飾つてあるから。金色の折り紙でできた、きちょうどめんな手裏剣<sup>※<sup>3</sup> しりけん</sup>と一緒に。

だけど、この写真をコウキが持つてゐるなんていうことは、ありえないはずだつた。

ジャングルジムの上。

青空をバックに。

僕と彼が、肩を組む。

コウキが顔を上げ、ほほえみともつかぬ、泣きだす直前ともつかぬ表情で、

「ひさしぶり」

と、ついた。

中学二年に上がると同時に転校し、もっとあとになつて、コウキは

思い出したという。ずっとむかし、小学一年生の終わりに両親が離婚して、父と、五つ上の兄と離れ離れになる前の、ささやかな友達のことを。

引っ越してから開封しないままだったダンボールを整理していたら、この写真が出てきた。コウキの脳みその片隅が、強く刺激された。むかし、ずっとむかしの記憶。

なんだつけ……、名前。

仲、よかつたんだけどなあ。

あとになつてコウキは思い出す。

ダイスケだ。

一年生のあいだしかあの小学校では過ごさなかつた。卒業アルバムも当時の連絡網もなくて、名前を確認するすべはない。だけど、写真には面影<sup>おもかげ</sup>があつた。記憶にある中学一年生の僕の姿かたちは、しつかりと——とくに目元の辺りに——残つていたという。<sup>4</sup>なんでもつと早く気づかなかつたんだろう。

転校するより前に。部活が楽しかつたころに。

後悔した。マンションの四階から死にたくて飛び降りたのに、不覚にも生き延びて、それならと、人生を新しく始めたつもりでいた。飛ぶ直前までの人生には、なにひとつ思い残すことはなかつた。——そのはずだつた。だからこそ写真を始めたのだ。

しかし、むかしむかしの友達と僕がこうも結びついてしまつたら、それは呆氣<sup>あっけ</sup>なく崩れた。前の人生には、思い残すことが、たつたひとつ、ある。そう認めざるをえなかつた。空色ポストを知つたのもこのころだ。

会いに行こう、と決めた。いますぐじやなくていい。準備ができたらいい。会つても大丈夫だと確信できたらいい。

僕に会つて、柔道部での一年間を思い出すことをコウキは恐れていた。飛ぶ瞬間の、なにもかも諦めたあの気持ちや、落ちているあいだに駆け巡つた走馬燈を恐れていた。植え込みにぶつかって勢いを弱め、死ねないとわかつたときの絶望と、死ないとわかつた安堵を恐れていた。

<sup>5</sup> 会いたいかどうか。それでいえば、少しも会いたくなかった。

でも、会わなければいけない、とわかつていた。それが会いたいということなんども。

「おれは過去と向きあわなくちゃいけなかつた」

長いあいだ悩んだ。新しい学校で、新しい人生を、新しい友達とともに送りつづけることは、べつにむずかしくなかつたから。

「だけど、心の底に、ずっとなにかが沈殿<sup>ちんでん</sup>してた。あつためても、かきませても、溶けない」

決心がつき、歩道橋の写真を撮つたのは、最近のことだつた。高校二年の夏ごろのこと。行動を起<sup>7</sup>せば呆氣なかつた。シャツジャーを押した瞬間に確かな手応えがあつたという。そうして、秋に「空色ポスト写真展」の案内状が届き、展示される百枚に選ばれていた。

(北川 樹『ホームドアから離れてください』幻冬舎より)

※1 ハンドルネーム：「空色ポスト」に投函する時の仮の名前。

※2 クドウ先輩：柔道部で二人に優しくしてくれた先輩。

※3 手裏剣：小学校一年生のコウキが転校する前にダイスケに送つたもの。

※4 走馬燈：次々に思い出された過去の出来事のこと。

問一 線a 「謙遜する」・b 「吟味して」とあります、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 謙遜する

- ア 活気がなくなつて縮こまる  
イ 自分を劣つたものと考へる  
ウ 控えめな態度をとる  
エ とても恥ずかしがる

b 吟味して

- ア 無駄をなくして  
イ ためらつて  
ウ 無意味だと考へて  
エ よく確かめて

問二 線1 「思わぬ言葉が一困つてしまふ」とありますが、この時の「ダイスケ」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 柔道部での出来事の責任が自分にはないことを伝えようとするコウキの言葉に、どう答えればよいか迷つてゐる。  
イ コウキの生活を想像していた時に、不意にコウキから言葉をかけられ、うまく答えられずにいる。

ウ 自分の写真を認めてくれるコウキの言葉を嬉しく思う一方で、その発言の真意が分からず言葉に詰まつてゐる。  
エ コウキが過ごしたつらい日々を思つていたのに、そのことを感じさせない彼の明るい言葉に驚いてゐる。

問三 線2 「その写真は、あまりにも強烈だった」とあります

が、どのような点で「強烈」だったのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学生の時の辛さと向き合い、前向きに生きようとするコウキの写真は、雀などを撮つてその辛さから逃げている自分の弱さを突きつけるものであつた点。

- イ 自分はコウキに申し訳ないという気持ちばかりを抱えていたのに、コウキの写真は二人の思い出の場所をずっと大切にしていたことが分かるものであつた点。

- ウ 雀の写真を褒めてくれたコウキの言葉は心からのものではなく、彼の写真は試合に勝つた自分のことを恨み続けてきたことを感じさせるものであつた点。

問四 ——線3 「コウキの——僕の耳に入つて割れる」とあります

が、この表現について説明したものとして最も適当なものを次の  
中から選び、記号で答えなさい。

ア 今思いをダイスケに伝えられたことで、彼との間にあつたわだかまりがとけたことを表している。

イ 独り言のような言葉であったが、ダイスケを思つた言葉が消え入ることなく彼に届いたことを表している。

ウ ダイスケに謝ることができたことで、過去の辛い思いが消え去り気持ちが軽くなつたことを表している。

エ 勇気を出して言つた言葉が弱々しいものになつてしまい、思いがダイスケに伝わらなかつたことを表している。

問五 ——線4 「なんで——氣づかなかつたんだろう」とあります

が、「コウキ」がこのように考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 小学一年生の時に仲がよかつた友達がダイスケだと分かっていたら、彼とのつながりが、死ぬということを思いとどまらせたはずだから。

イ 自分にとつて大切な友達が本当は一番近いところにいたのだと分かっていたら、苦しいだけの部活も楽しんでいけはずだから。

ウ 昔仲がよかつた友達と中学校でもつながつていたのだと分かっていたら、辛い日々も明るい未来につながつていると想像できただずだから。

工 小学一年生の時のあの友達がダイスケだと分かつていたら、たとえ部活を辞めたとしても自分にも楽しい過去があつたと思えたはずだから。

問六 ——線5 「でも、会わなければいけない、とわかつていた」とあります、ここで「コウキ」の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 部活を続けられなかつた恥ずかしさは、仲のよかつたダイスケに会うことでしか癒すことができない。

イ 柔道部に入部した時から感じていた孤独感は、仲がよかつたダイスケしか理解してくれない。

ウ 仲がよかつたダイスケに会わなければ、柔道部での出来事から離れ、新しい一步を踏み出すことはできない。

エ 過去の出来事を克服して新しい人生を生きるためには、仲がよかつたダイスケと共に歩んでいくしかない。

問七 ——線6 「だけど、心の底に、——溶けない」とありますが、「コウキ」の中に「沈殿」していた「あつためても、かきませても、溶けない」ものとはどのようなものだと読み取れますか。「溶けない」という言葉に注意して、丁寧に説明しなさい。

工 の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 柔道部での出来事に苦しんできたコウキは、過去を忘れる

ために写真を撮ることを始めた。写真を撮る中でダイスケと

の楽しかった記憶を思い出したコウキは、過去から目をそむ

けないことで、明るい未来が開けていくはずだという確信を持てるようになった。

イ コウキは耐え難い日々を送る中、ダイスケとのつながりを改めて知ったことで自分の人生を受け入れられるようになつた。そのダイスケとの思い出の場所を写真に撮ることを通じて、コウキは彼との思い出がなくなることはないという確信を持つまでになった。

ウ コウキは何も悪くない自分が、辛い日々を送っていることに鬱屈した気分を抱えていた。しかしダイスケがかつての親友だと分かったことで、コウキはこれから的人生に希望を感じ、ダイスケに会う機会も必ず巡つてくるはずだという確信を持つことができた。

エ ダイスケとのつながりを知ったコウキは、彼に会いたいと思う一方で、会うことで辛い過去を思い出してしまうことには不安を感じていた。しかし自分を取り巻く世界に自らかわる中で、コウキはダイスケに会いに行けるという確信を持てるまでになった。

## 四

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

ある人のいはく、「人は良き友に会はむことをこひ願ふべきなり」。  
麻の中の蓬はためざるに、おのづから直し

といふたとひあり。蓬は枝さし、直からぬ草なれども、麻に生ひまじりたれば、ゆがみてゆくべき道のなきまに、心ならず、うるはしく生ひのほるなり。心の悪しき人なれども、うるはしく、うちある人の中にまじはりぬれば、さすが、かれこれを憚るほどに、おのづから直しくなるなり。

これによりて、良き友に会はむこと、経にも説かれ、文にも勧めた  
り。顏氏が家訓には、  

与一善人居	如入芝蘭之室	久	而	自芳	也
与二惡人居	如入鮑魚之肆	久	而	自	X

  
といへり。また、ある文には、

人の心は、水の入れ物にしたがふがごとし。入れ物細ければ、すなはち細し。円ければ、すなはち円くなる。心は朋友にならぶ。  
いかでか撰ばざるべけん  
と書けり。また、九条殿遺誠には、  
高声惡狂の人にもなふことなかれ

と教へたまへり。

かかるれば、はかなくうちかたはむ友なりとも、よくその人を撰ぶべし。

※1 顏氏が家訓：中国南北朝時代の学者、顏之推が著した書物。

家訓とは、子孫への訓戒を示したもの。

※2 芝蘭之室：芝も蘭も香り高いことから、転じて「芝蘭」は善

人や賢者のたとえ。対句に出てくる「鮑魚之肆」は、塩漬けの魚を売っている店のこと。

※3 九条殿遺誠：平安時代中期の右大臣、藤原師輔が貴族としての心得を記した家訓。

問一 —— 線 a 「ためざるに」・ b 「はかなく」とあります、この意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a ためざるに

- ア 集めておかなくてても
- イ 形を矯正しなくてても
- ウ 生育が良くななくても
- エ 大切にされなくても

b はかなく

- ア なにげなく
- イ 仲良さそうに
- ウ 楽しげに
- エ 際限なく

問四 に入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 香  
イ 旨  
ウ 臭  
エ 辛

問五 —— 線 4 「いかでか撰ばざるべけん」とありますが、その解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どのように友を選ぶべきなのだろうか  
イ なぜ友を選ばなければならぬのだろうか  
ウ 友を選ぶことはなんと難しいのだろうか  
エ どうして友を選ばないでよいだろうか

問二 —— 線 1 「心の悪しき人」・ 2 「うるはしく、うちある人」とありますが、それらを比喩的に表現した言葉をこの段落の中からそれぞれ漢字一字で探し、抜き出しなさい。

問三 —— 線 3 「如入芝蘭之室」は、「芝蘭の室に入るが」としと訓読します。これを参考にして、解答欄に返り点をつけなさい。なお、送り仮名は不要です。

問六 本文の内容と合致することわざを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア イ イ ウ エ  
青は藍より出でて藍より青し  
水は方円の器に従う  
蒔<sup>ま</sup>かぬ種は生えぬ  
長い物には巻かれよ



# 〔国語〕

## 解答用紙（高校第二回）

三

問

一

a

b

問

二

問

三

問

四

問

五

問

四

問

五

問

三

(1)

二

問

一

問

二

.

場  
所

(2)

一

(あ)

えんかく

(い)

せいいか

(う)

けんとう

(え)

さんぱい

(お)

こじ

受	驗	番	号

氏名

得点

問四	問三	問一	問八	問七	問六
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/> <input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
問五	如入芝蘭之室	問二 1 <input type="text"/> <input type="text"/> 2	問二 1 <input type="text"/> <input type="text"/> 2	<input type="text"/>	<input type="text"/>

